

原著

自己開示性と重要他者との関係

— 青年期について —

天野洋子¹⁾ 安里葉子¹⁾ 新城正紀¹⁾ 上田礼子¹⁾

本研究の目的は、青年期にある者を対象として、彼らが自己開示し相談できる相手、尊敬している人、自己決定に際し大きな影響を受ける他者等をあきらかにし、今後の精神保健活動に役立てることにある。調査対象 平成12年7月、沖縄県の短期大学2年生(女子)47名である。調査方法は質問紙法であり、(1)生き方、性の問題、結婚、困ったときなどに誰に、どのくらい、話をしたり相談したりするか(2)尊敬する人、結婚生活について考える際に影響を受けたものなどであった(調査票は1984年上田作成を用いた)。

結果:1)、青年期にある者の自己開示の程度は項目によって誰にどの程度話すかに違いがあった。2)、彼らが全ての項目で最も自己開示できる相手は友人であった。友人に全部話すものの割合は、生き方57%、性の問題70%、結婚について68%、困っているとき85%であった。これは他の人たちに対する自己開示に比べ非常に大きな割合であった。

3) 母親に何でも話せる者は生き方27%、結婚24%、困ったとき30%であり三項目とも第2位であった。

4) 全ての項目につき自己開示できる相手(少し話すも含めて)の平均は友人94%、母親58%、きょうだい55%、先輩38%、父親34%、親しくないが信頼できる人26%、先生20%、祖父母13%、親戚10%であった。

5) 性について自己開示する相手は友人93%、きょうだい41%、先輩36%、親しくないが信頼できる人23%、母親20%、先生14%、父親7%、親戚5%、祖父母0%であり母親、父親の割合は低かった。

6) 父親について 父親への相談は母親にくらべかなり順位は低かった。

しかし、結婚条件として求める事や、結婚したらどんな夫婦になりたいかなどにおいて子どもの考え方に父親は強く影響を及ぼしていることが明らかになった。

以上の結果から青年期にあるものの重要他者としては一位が友人、2位母親、きょうだい、先輩、父親の順であった。ゆとりがなく他者との信頼関係を築くのに努力を要し、きょうだいの数が減少してきている時代に、彼らが安心して自己開示できる人々に出会い豊かな人間関係を築けるよう周りの大人達の配慮が必要であることが示唆された。

キーワード: 青年期、相談相手 自己開示性 重要他者

緒言

青年期には、自ら直面する様々な事柄について、自分で考え判断し行動することが必要になってくる。しかし、人々の価値観の多様化が進む現代において人間関係の希薄化が問題になってきている。青年期にある者が信頼して相談できる他者を見つけることが困難になってきているからである。Jourard は、自分自身について他者に話すことを「自己開示 (Self-Disclosure)」とよび、よく自己開示する人物ほど精神的に健康であると主張している。東京都生活文化局による「大都市青少年の人間関係に関する調査」(1985)では悩みを打ち明けられる相手として男子では中1から高3にかけて学年があがるにつれて同性の友人の率が上昇してくる。女子では中1から一貫して同性の友人が多く選択されている。それとは逆に父や母の比率が減少してくると報告されている¹⁾。また総務庁青少年対策本部「現代青年の生活と価値観」

(1986)によると19~23歳の男女は「身近な人間関係で嫌なことがあったとき」や「自信をなくして落ち込んだとき」に相談相手として友人が多く選ばれているが、「進路について迷ったとき」に父や母が多く選ばれている。一方、誰にも頼らないと回答したものは項目によっても15%~30%あると報告されている²⁾。また、上田はストレスがあっても対処行動がとれずに潜在的問題をもっている生徒がいることを報告している³⁾。

そこで、本研究の目的は、現代において青年期にあるものが自己を開示し相談できる相手、尊敬している人、自己決定に際し大きな影響を受けている他者等について調査検討し今後の精神保健活動に役立てることである。

研究方法

沖縄県の短期大学2年生(女子)47名を対象として、2000年7月に質問紙による調査を実施した。調査内容は、(1)生き方、性の問題、結婚、や困ったときなどに、誰に、どのくらい、話をしたり相談したりするかを父親、母親、きょうだい、祖父母、親戚、先輩、友人、先生、

1) 沖縄県立看護大学

親しくないが信頼できる人の欄にそれぞれ番号で記入するものである。番号は、程度を示し、1. 全部話す 2. 少し話す 3. 話すけれど本当のことは話さない 4. 話さない で該当者がいない場合 / を記入するもの。(2) 尊敬する人や結婚生活について考える際に影響を受けたものなどで構成されている。調査票は1984年上田礼子制作のものをを用いた。(1) からは青年期のかれらが自己開示する対象と程度(自己開示性と重要他者)について各項目ごとに検討した。(2) からはかれらの考えに影響を与えた者(重要他者)について検討した。

結果

47名の回答者につき分析した。回収率(100%)

1 対象の属性

家族形態は核家族は91%、拡大家族は9%であった。平均年齢は父親49歳、母親47歳であった。父のいない人：7%、母のいない人：0%であった。きょうだいの数は平均3.4人、きょうだいのいない人：1名であった。(表1参照)

表1 対象の属性

	人 (%)
家族形態	
核家族	40 (91.0)
祖父母と同居	4 (9.0)
父親の平均年齢 (歳)	49 ± 4
母親の平均年齢 (歳)	47 ± 4
平均同胞数 (人)	3.4
	n = 47 (不明 3)

2 対象の友人関係

1) 親友といえる友人の有無は47人中、親友がいる人45人(96%)、いない2人(4%)であった。

2) 親友のできた時期：小学校時代20%、中学校時代33%、高校時代29%、大学時代18%であった。中学、高校時代に多く親友をつくっていた。(図1参照)

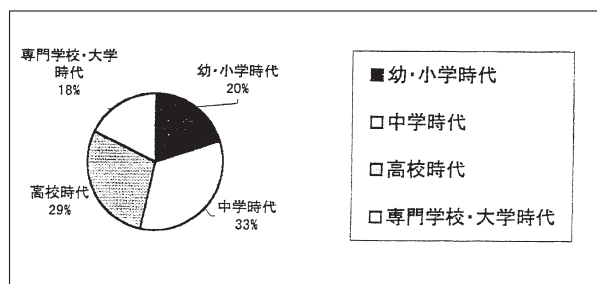


図1 親友のできた時期 n = 47 (不明 2)

3 自己の性の受容

女性でよかったと回答した者は35名(74%)であり、その理由として子どもが産める、子どもを育てられるとしたものが多かった。その他にはおしゃれができる、好きなことができる、生きやすいなどがあった。一方、女性であることを嫌だとした者は5名(11%)あり、理由として、男性は夜歩き自由、楽しそうなどがあった。また、どちらともいえないとしたものは7名(15%)あり、理由として、どちらにも良い点と悪い点があるとしていた。自己の性を肯定的にとらえている者が多かった。(表2参照)

表2 自己の性についての受けとめ方

	人 (%)
女でよかった	35 (74.5)
女であることはいやだ	5 (10.6)
どちらともいえない	7 (14.9)
合計	47 (100.0)

n = 47

4. 自己開示性

1) 生き方について：生き方について全部話すのは、多い順に友人57%、母親27%、きょうだい27%であった。次に対象となる人の人数は同数で先輩9%、先生8%、父親7%となり、次いで親戚5%、祖父母5%、親しくないが信頼できる人3%の順となった。“話さない”に関してで多い順では、1位親戚84%、2位祖父母68%(祖父母と同居している者9%)であった。生き方については多くの人に相談していた。(表3参照)

2) 性について話す相手：性について全部話す相手は、多い順に友人70%、先輩6%、兄弟5%、先生3%、母親2%であった。少し話すを入れると多い順は、友人41人、きょうだい18人、先輩16人、親しくないが信頼できる人10人、母親9人、先生6人、父親3人であり身内の母親より他人が上位を占めていた。話さないでは多い順に、祖父母100%、親戚89%、父親87%であった。性については友人以外に相談する相手は非常に少なかった。(表4参照)

3) 結婚について：全部話すと回答した者の相手は友人68%、母親24%、きょうだい24%、先輩15%、父親12%であった。父親には少し話すを加えると(44%)であり、約4割強の者が話していた。“話さない”は多い順で、祖父母86%、親戚81%、先生84%であった。結婚については家族をより多く相談相手に選んでいた。(表5参照)

4) 困ったとき：困ったときに何でも話す相手は多い

表3 生き方について話し、相談する相手

	父親	母親	きょうだい	祖父母	親戚	先輩	友人	先生	信頼できる人
	n=41	n=44	n=37	n=37	n=37	n=34	n=44	n=38	n=35
全部話す	3 (7.3)	12(27.3)	10(27.0)	2(5.4)	2(5.4)	3(8.8)	25(56.8)	3(7.9)	1(2.9)
少し話す	18(43.9)	22(50.0)	16(43.2)	7(18.7)	3(8.1)	14(41.2)	16(36.4)	13(34.2)	11(31.4)
話すけど本当のことは言わない	2(4.9)	4(9.1)	1(2.7)	3(8.1)	1(2.7)	3(8.8)	2(4.5)	3(7.9)	5(14.3)
話さない	18(43.9)	6(13.6)	10(27.0)	25(67.6)	31(83.8)	15(44.1)	1(2.3)	19(50.0)	18(51.4)

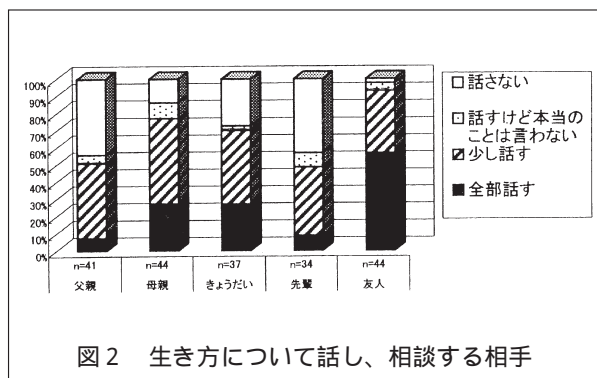


図2 生き方について話し、相談する相手

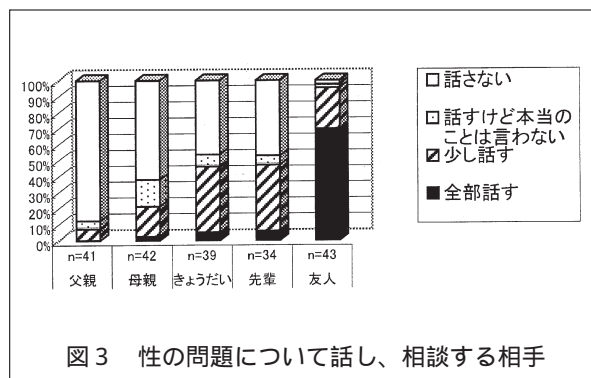


図3 性の問題について話し、相談する相手

表4 性の問題について話し、相談する相手

	父親	母親	きょうだい	祖父母	親戚	先輩	友人	先生	信頼できる人
	n=41	n=42	n=39	n=35	n=36	n=34	n=43	n=38	n=35
全部話す	0(0.0)	1(2.4)	2(5.1)	0(0.0)	0(0.0)	2(5.9)	30(69.8)	1(2.6)	0(0.0)
少し話す	3(7.3)	8(19.0)	16(41.0)	0(0.0)	2(5.6)	14(41.2)	11(25.6)	5(13.2)	10(28.6)
話すけど本当のことは言わない	2(4.9)	7(16.7)	3(7.7)	0(0.0)	1(2.8)	2(5.9)	1(2.3)	3(7.9)	4(11.4)
話さない	36(87.3)	26(61.9)	18(46.2)	35(100)	32(88.9)	16(47.1)	1(2.3)	29(76.3)	21(60.0)

順に、友人85%、母親30%、きょうだい25%、先輩15%であった。少し話すも加えると友人85%、きょうだい181%、母親76%、先輩55%、父親46%であった。話さないでは多い順位に親戚79%、先生71%であり祖父母は66%であった。“困ったとき”では友人の他に家族に相談していた。(表6参照)

生き方、性について、結婚について、困ったときの回答結果を 全体的にみると何でも話し相談する相手の一位は友人69%であり、つぎに母親21%、きょうだい20%、先輩11%、父親6%、先生5%、祖父母2%、親戚2%、親しくないが信頼できる人1%、であった。しかし、話し相談する相手は相談項目により違いがあった。また、話し相談する相手の一人あたりの平均人数は多い項目順に生き方について4.1人、困ったとき3.7人、結婚について3.5人、性について2.4人であった。(表7参照)

5. 憧れるあるいは尊敬する人物

1) 憧れ・尊敬する人の有無

憧れる人があると回答22名 (47%)、ない116名 (34%)、不明9名 (19%) であった。(表8-1参照)

2) 憧れ・尊敬する人物

母親、友人がそれぞれ7名：32%、芸能人、先生がそれぞれ6名：27%、父親、知人それぞれ2名：9%、両親、彼氏それぞれ1名：5%、その他6人：27%であった。(表8-2参照)

その他の6名は、努力する人、行動力のある人、夢を追いかける人、人それぞれなどと記載されていた。あこがれ・尊敬する人は身近にいる人たちであった。

6. 結婚に関すること

1) 結婚相手として求める条件は多い順から、1位 性格、2位 価値観、3位 経済力であった。4位は低

表5 結婚について話し、相談する相手

	父親	母親	きょうだい	祖父母	親戚	先輩	友人	先生	信頼できる人
	n = 41	n = 42	n = 38	n = 35	n = 36	n = 34	n = 44	n = 38	n = 34
全部話す	5(12.2)	10(23.8)	9(23.7)	0(0.0)	0(0.0)	5(14.7)	30(68.2)	3(7.9)	1(2.9)
少し話す	13(31.7)	21(50.0)	14(36.8)	5(14.3)	4(11.1)	10(29.4)	13(29.5)	3(7.9)	10(29.4)
話すけど本当のことは言わない	2(4.9)	3(7.1)	0(0.0)	0(0.0)	3(8.3)	4(11.8)	1(2.3)	0(0.0)	2(5.9)
話さない	21(51.2)	8(19.0)	15(39.5)	30(85.7)	29(80.6)	15(44.1)	0(0.0)	32(84.2)	21(61.8)

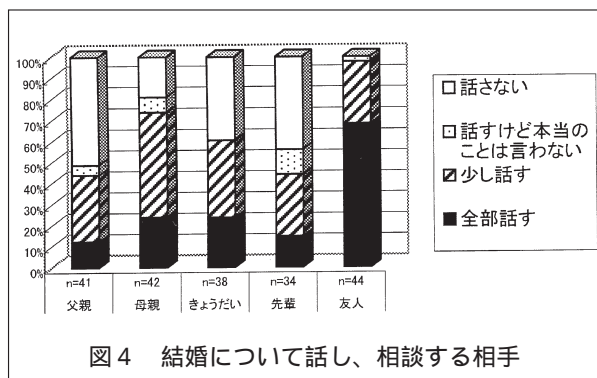


図4 結婚について話し、相談する相手

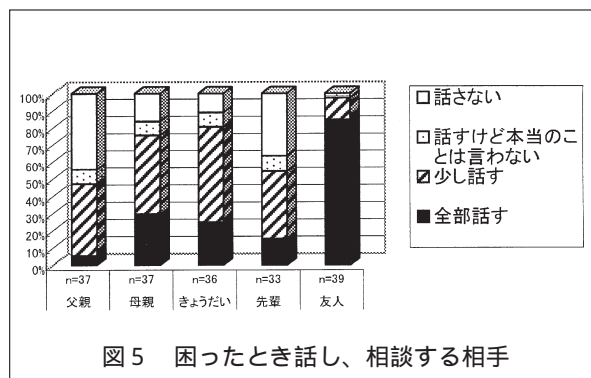


図5 困ったとき話し、相談する相手

表6 困ったとき話し、相談する相手

	父親	母親	きょうだい	祖父母	親戚	先輩	友人	先生	信頼できる人
	n = 37	n = 37	n = 36	n = 35	n = 33	n = 33	n = 39	n = 34	n = 32
全部話す	2(5.4)	11(29.7)	9(25.0)	1(2.9)	1(3.0)	5(15.2)	33(84.6)	1(2.9)	0(0.0)
少し話す	15(40.5)	17(45.9)	20(55.6)	8(22.9)	5(15.2)	13(39.4)	5(12.8)	6(17.6)	12(37.5)
話すけど本当のことは言わない	3(8.1)	3(8.1)	3(8.3)	3(8.6)	1(8.6)	3(9.1)	1(2.6)	3(8.8)	3(9.4)
話さない	16(43.2)	6(16.2)	4(11.1)	23(65.7)	26(78.8)	12(36.4)	0(0.0)	24(70.6)	17(53.1)

表7 話し相談する相手 (全部話す人+少し話す人)

	父親	母親	きょうだい	祖父母	親戚	先輩	友人	先生	信頼できる人	合計	1人平均相談者数
生き方について	21	34	26	9	5	17	41	16	12	181	4.1
性について	3	9	18	0	2	16	41	6	10	105	2.4
結婚について	18	31	23	5	4	15	43	6	11	156	3.5
困ったとき	17	28	29	9	6	18	38	7	12	164	3.7

単位：人 n = 47 (不明：3)

く 健康、5位 趣味の一致であった。3位までに挙げられなかったものに学歴や宗教があり、数は少なかったが家族の状態、容姿などがあつた。(表9参照)

2) 結婚の条件を考える際に影響をうけたものでは、恋人、母親、父親 同性の友人が上位を占めていた。3位までの合計は多い順に母親、同性の友達、父親、恋人であった。母親、父親の影響をかなり受けていることが認められる。(表10参照)

7. 結婚生活に関すること

1) どんな夫婦になりたいかとの質問には夫も妻も対等が63%と多く、どちらかという妻主導型17%と、どちらかという夫主導型15%が同程度であった。夫主導型は4.3%であった。妻主導型はなかった。(表11参照)

2) 夫婦のあり方に影響をうけたものとして一番多かったのは 母親32%、父親32%であり、恋人は16%であった。同性の友人の影響は少なかった。(表12参照)

表8-1 憧れ・尊敬する人の有無

	人	%
いる	22	46.8
いない	16	34.0
不明	9	19.1
合計	47	100.0

n = 47

表8-2 憧れ・尊敬する人

	人	%
母親	7	31.8
友人	7	31.8
芸能人	6	27.3
教師	6	27.3
父親	2	9.1
知人	2	9.1
両親	1	4.5
彼氏	1	4.5
その他	6	27.3

n = 22

3) 本人から見た母親、父親 父母を理想と回答した人は 母親30%、父親22%であった。好ましいも入れると母親55%、父親44%であった。父母を否定的にとらえ 母親11%、父親24%に対しては“あんな風になりたくない”と回答していた。母親に比べ父親への点が低くなっていた。(表13参照)

考察

青年期にある者の自己開示は内容によって誰にどの程度するかの違いがあった。生き方、結婚、困ったときなどでは、1位が友人、2位に母親、3位きょうだいの順であった。そのなかで、生き方については、多くの人に相談していることが明らかになった。結婚についてと困ったときでは比較的よく家族の者に相談しており、これらについては、より实际的に解決に結びつきそうな相手を選択していた。一方、性の問題に関しては、友人以外に対して自己開示することが非常に少なかった。少し話す相手まで入れた順位では、友人の次に兄弟、先輩、親しくないが信頼できる人、母親であった。母親や父親には話にくいことがみられた。これらの理由として、世代間の性に対する価値観の違いも影響していることと推測される。また異性に関してや自分たちの性についての話は、同じ時代に生まれ育ち、青年期にある者同士で、考え方や心理的、生理的条件が似通っているため、互いによく理解し合えるものと推測される。

また性についてはうっかり自己開示したばかりに自分に不利な結果が引き起こされるのではないかと考える事もある。入谷らの高知県内の高校生を対象にした報告⁴⁾によると女子生徒が性についての情報源として「友人」と回答した割合は性交経験の有で81%、無しで61%であり、次は雑誌からであり、両群とも約3割であった。また学校と回答した割合は約20%であった(この場合の学校とは教師による教育活動を指している)。性に関する相談機関の希望では、女子の50%は保健室、次に思春期等の専門病院15%であると報告されている。一般的には性に関する情報は友人からのものだけでは不十分であ

表9 結婚相手として求める条件

項目	人 (%)		
	1位	2位	3位
性格	30 (68.2)	7 (15.9)	5 (11.4)
経済力	5 (11.4)	12 (27.3)	16 (36.4)
価値観	7 (15.9)	14 (31.8)	8 (18.2)
健康	1 (2.3)	5 (11.4)	7 (15.9)
趣味の一致	0 (0.0)	4 (9.1)	3 (6.8)
容姿	1 (2.3)	1 (2.3)	2 (4.5)
家族の状況	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (4.5)
宗教	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
学歴	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	0 (0.0)	1 (2.3)	1 (2.3)
合計	44 (100.0)	44 (100.0)	44 (100.0)

n = 47 (不明 3)

表10 結婚の条件を考える際に影響をうけたもの

項目	人 (%)		
	1位	2位	3位
母親	9 (23.7)	10 (26.3)	3 (7.9)
父親	8 (21.1)	3 (7.9)	6 (15.8)
同性友人	4 (10.5)	10 (26.3)	5 (13.2)
恋人	10 (26.3)	2 (5.3)	2 (5.3)
姉妹	0 (0.0)	3 (7.9)	5 (13.2)
異性友人	0 (0.0)	1 (2.6)	7 (18.4)
兄弟	1 (2.6)	2 (5.3)	2 (5.3)
事件	1 (2.6)	2 (5.3)	0 (0.0)
先輩	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (2.6)
親戚	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.3)
教師	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.3)
テレビ・新聞	1 (2.6)	4 (10.5)	1 (2.6)
本	1 (2.6)	1 (2.6)	0 (0.0)
雑誌	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.3)
その他	2 (5.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	38 (100.0)	38 (100.0)	38 (100.0)

n = 47 (不明 9)

表11 結婚したらどんな夫婦になりたいか

項目	人	%
夫も妻も対等	29	63.0
どちらかという妻主導	8	17.4
どちらかという夫主導	7	15.2
夫主導型	2	4.3
妻主導型	0	0.0
合計	46	100.0

n = 47 (不明 1)

ろう。性に関する学習は学校や教師によっては非常に熱心に取り組んでいるところもあるが、あまり行われていない学校もある。正しい情報を与えるためには性に関する学習を小学校から高校まで連続して発達段階にそって全国の全ての学校で行う必要があると示唆された。

全ての項目に関して、最も自己開示できる相手はこの時期には友人であった。友人に全部話す者は生き方57%、性の問題70%、結婚68%、困ったとき85%であった。これは他の相談相手の人たちに比べて非常に高かった。青年期には心の支えを求め、共通の悩みを共感し合い、お互いに理解できる精神的なつながりで親友を選ぶと言われる。また松井豊⁵⁾は、友人は青年の心理的安定をもたらす、社会的スキルを学習する場を提供し、生き方のモデルとなると言う意味で青年の発達に重要な役割をはた

していると述べている。

今回の結果からも、親友は安心して自己開示できる重要他者であることが明らかになった。そして、中学、高校、大学時代は親友のできる大切な時期でもあった。

親友が彼らにとって一番自己開示できる大切なものであることから、今回の調査において親友がいないと回答した2名につき確認した結果、2名とも全部話す相手として一人は性についての1項目、もう一人は性以外の3項目で友人を選択していた。一方、親友がいると回答した者のうち2名は、全部話す相手はどの項目に関して一人もいなかった。これは、各自の親友と考える条件や概念の違いが関与しているといえよう。今回の調査では、全員が2人以上の者に自己開示していることが明らかになった。このことは青年期のこころの健康上望ましいことといえよう。

母親との関係について、母親に何でも話せるとした者は、生き方27%、結婚について24%、困ったとき30%と3項目とも第2位にあり、青年期の者が友人の次に自己開示できる相手であった。

きょうだいとの関係では、きょうだいが性の問題や困ったときに二番目に何でも話せる相手であった。きょうだいは一番身近にいる生育環境が同じでお互いに理解し共感できる重要他者といえよう。今回の調査では対象者の平均きょうだい数は3.4人であった。しかし、今後子ども数が減り続け、平成10年度の合計特殊出生率1.38⁶⁾

表12 夫婦のあり方に影響をうけたもの

項目	人 (%)		
	1位	2位	3位
母親	12 (31.6)	17 (44.7)	3 (7.9)
父親	12 (31.6)	10 (26.3)	3 (7.9)
恋人	6 (15.8)	1 (2.6)	6 (15.8)
同性友人	1 (2.6)	3 (7.9)	7 (18.4)
親戚	1 (2.6)	1 (2.6)	5 (13.2)
兄弟	0 (0.0)	1 (2.6)	4 (10.5)
姉妹	1 (2.6)	0 (0.0)	3 (7.9)
テレビ・新聞	2 (5.3)	1 (2.6)	1 (2.6)
雑誌	0 (0.0)	1 (2.6)	2 (5.3)
異性友人	2 (5.3)	1 (2.6)	0 (0.0)
事件	1 (2.6)	0 (0.0)	1 (2.6)
教師	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.6)
本	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
先輩	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	0 (0.0)	2 (5.3)	2 (5.3)
合計	38 (100.0)	38 (100.0)	38 (100.0)

n = 47 (不明9)

表13 本人から見た母親・父親

項目	人 (%)	
	母親 n = 44	父親 n = 45
理想的	13 (29.5)	10 (22.2)
好ましい	11 (25.0)	10 (22.2)
まあんなものかと思う	13 (29.5)	11 (24.4)
あんなふうになりたくない	5 (11.4)	11 (24.4)
その他	2 (4.5)	3 (6.7)
合計	44 (100.0)	45 (100.0)

となり、きょうだいのいない者が多くなっていく。出生動向基本調査による平成9年平均出生児数は2.2⁷⁾であった。今後相談相手としてのきょうだいの減少では大変な影響が出てくるのが危惧される。

先輩との関係では、先輩は友人、母親、きょうだいについて相談できる人であった。なかでも性に関しては友人、きょうだいの次に相談される人であった。

学校生活、学外のクラブ活動、ボランティア活動などでよい先輩との出会いも大切なことであることが示唆された。宮下一博⁸⁾は先輩・後輩関係の意義を第一に、ある目標をみんなで共有し、リーダーの下に協力していく点にあり、自分の持っている考えをそれぞれ出し合い先輩、後輩、同輩の意見に耳を傾け、結論をだしていく、こうしたプロセスのなかで自己の信念や価値観も徐々に

明確になっていくこと、第二に社会性の獲得 目上の人や尊敬できる人に従いつつ、下の者に適切な指導 (対応) をおこなうこと。また集団内での役割を上手く果たす事を学ぶことと述べている。

今後、きょうだいのいない者や、ひとり親の家庭が増えてくるのが推測されるが、それらに代わる重要他者として先輩の存在も大切になるといえよう。父親との関係については父親が全てを話す相手として選択される回答は少なく、母親に比べかなり相談順位は低かった。この理由として、従来の父親は主に仕事中心で経済的面で家庭を支え、母親とは、育児、教育、の面で役割分担をしてきたため、父親が子どもとふれあう時間が少なかったことも影響していると考えられる。一方、今回のアンケート結果では、結婚相手として求める条件や結婚生活のあり方などで子どもの考え方に父親は強い影響を及ぼしていることが明らかになった。その意味で女子にとっても父親は重要他者であることが知られる。

祖父母との関係では、祖父母が生き方や、困ったときなどに相談相手に選ばれていた。同居している率9%であることを考慮すれば相談する割合が少ないのも当然であろう。ただし性については全く相談されていなかったことに注目すべきであろう。親戚、近所の人たちは相談相手としてあまり選ばれていなかった。これは、家族同士の日頃の交際程度や年令の近い者の有無など関係しているためであろう。以上のことから、彼らが自己開示で

きる人々に会えるように、周りの大人たちの新たな戦略が必要であると示唆された。今後の課題として地域活動が活発な所での調査や女子より自己開示が少ないと言われる男子についての調査などを実施していく必要がある。

なお、上田らの1984年、東京での調査結果⁹⁾の一部と比較すると今回の結果のほうが自己の性について肯定する人が多くなり、憧れ尊敬する人に、より身内の人をあげ、結婚したらどんな夫婦になりたいかでは夫主導型から夫も妻も対等と回答する人が多くなったことと、誰にどのくらい相談したり話したりするかでは1984年には多い順に友人、母親、きょうだい、父親であったが今回の結果では、きょうだいと父親の間に先輩がでてきたことなどである。

結論

女子の短期大学2年生47名について、自己開示性と重要他者に関するアンケート調査をおこなった。主な内容は生き方、性の問題、結婚、困ったとき、誰にどのくらい話しをしたり相談するかに関してと親友の有無や親などの重要他者との関係を検討した結果以下のことが明らかになった。

(1) 青年期にある者の自己開示の程度は項目によって誰にどの程度話すかに違いがあった。とくに性については友人以外に自己開示する率は非常に低かった。

(2) 彼らが全ての項目で一番自己開示できる相手は友人であった。友人に全部話すと回答した割合は、生き方について57%、性の問題で70%、結婚について68%、困ったとき85%であった。これは他の人たちに比べ非常に大きな割合であった。

(3) 母親になんでも話せるとした割合は、生き方について27%、結婚について24%、困ったとき30%と三項とも第2位になっていた。

(4) きょうだいについては生き方27%、結婚について24%となり、性については5%と低かったが、少し話すを加えると46%となった。

(5) 先輩について 先輩は友人、母親、きょうだいについて相談相手に選ばれていた。性についてはきょうだいとともに貴重な相談される人になっていた。

(6) 父親にすべてを話すと答えたものは少なく、母親に比べかなり相談順位は低かった。しかし、結婚条件として求めることや、結婚したらどんな夫婦になりたいかなどでかれらの考え方に父親は強く影響を及ぼしていることが判明した。

これらの結果から青年期にあるものの重要他者¹⁰⁾は一位友人、2位母親、以下きょうだい、先輩、父親をあげることができる。今後はきょうだいの数が減少してきている時代をふまえ、彼らが安心して自己開示できる人々に出会い、豊かな人間関係を築けるよう周りの大人達の配慮が必要であると示唆された。

文献

- 1) 加藤義昭ほか編：基礎心理学 入門青年心理学、108-118、八千代出版、1995.
- 2) 斉藤誠一編：人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係、19-27、培風館、1996.
- 3) 上田礼子：発達のダイナミックスと地域性、137-140、ミネルヴァ書房、1998.
- 4) 入谷仁志他：高校生の性意識及び性行動に関する研究、学校保健研究、42巻(第3号) 245-255、2000.
- 5) 斉藤誠一編：人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係、39-40、培風館、1996.
- 6) 厚生統計協会：厚生指標 臨時増刊 国民衛生の動向、2000年、47巻 9号
- 7) 厚生省監修：平成10年版 厚生白書 少子社会を考える 1998.
- 8) 無藤 隆ほか編：講座 生涯発達心理学 4 自己への問い直し 青年期 155-174、金子書房 1998.
- 9) 上田礼子他：親になることとその情報源について、母性衛生、第26巻(3号) 336-340、1985.
- 10) 上田礼子他：生涯人間発達学 180-192、三輪書店、1996.

Research on the Relation Between Self-Disclosure and Significant Others

— In the case of adolescence —

Amano Yoko, B.HCN.¹⁾ Asato Yoko, M.H.Sci.¹⁾
Shinjo Masaki, D.M.Sci.¹⁾ Ueda Reiko, D.M.Sci.¹⁾

Purpose : The purpose of this study is to investigate the relation between self-disclosure and significant others of adolescents and to find a support system for those who have latent problems.

Methods : We conducted the study by utilizing a questionnaire format. Subjects of the study were second-year students of a junior college. The questionnaire included items that explored their self-disclosure and relationship to significant others. Specifically, we explored whom they preferred talking to or consulting about their problems regarding life, sex, marriage, and troubles.

Results : The adolescent subjects first and most preferred persons with whom they talked to or consulted about their problems were their friends. The rates of their self-disclosures to friends are found to be different for each item. (Problems of life:57%, sex:70%, marriage: 68%, troubles:85%) The rates of their self-disclosures to their mother were as follows:(life:27%、 marriage:24%, troubles:30%) For these three items mother is the second person consulted. The significant others for students are as follows: the first is friends, the second is mother, the third is brother and sister, the fourth is senior, and the fifth is father.

Conclusions : In an age of decreasing family size where adolescents have fewer siblings it is vitally important that they be given opportunities to build rich human relationships and support systems with significant others where self-disclosure can take place in a mutually supportive and psychologically safe environment.

Key words: Adolescence, Adviser, Self-disclosure, Significant others.

1) Okinawa Prefectural College of Nursing